

「そう言えば、あの国は」

旧約聖書には、沢山の国と地域が出てきます。古来、ユダヤ・イスラエルの位置する場所は、「肥沃な三日月地帯」と言って、土地そのものが持っている生産性、作物を生み出す能力が高かったことに加えて、陸路、海路における交通の要衝としての価値もありました。要するに、とても肥えた土地であり、交通の便も良い土地だったということです。だから、ユダヤ・イスラエルの土地は、その長い歴史を通して、戦争と侵略を幾度も経験してきました。その経験において、ユダヤ・イスラエルが被害者になることもあれば、加害者になることもありました。それは、現代におけるパレスチナ問題にもつながってくる、ここ 4000 年ほど解決を見ない根深い問題でもあります。

ユダヤ・イスラエルを巡る、こうした「土地」に関する軋轢や不安は、多分、幸いにして天然の防護壁である海に囲まれた、私たち日本の国民には、正確に把握することはできないと思います。壁一枚、フェンス越しに見える向こう側には違う国の土地が広がっていて、その気になれば、穴を掘って、よじ登って越境できてしまうという感覚は、私たちの日常から想像することは難しいでしょう。越境して新天地に移住することができるという希望があること、越境されて安住の地が脅かされるかも知れないという不安があること。それらは島国に生きていると感ずることのない希望であり、また同時に不安であると言えます。

聖書を読む上では、そういう想像力を用いることも大切です。陸続きの場所から攻め込まれたら、どう感じるだろうか。陸続きの場所に、多種多様な文化と信仰を持つ民族が住んでいたら、どう感じるだろうか。とくに旧約聖書に記されている戦争と侵略の記録を、正しく丁寧に読み解く上では、字面を追って言葉を拾うだけでは物足りないと言えます。今日も、そのような「自分事ではない状

況」を、自分事にするという想像力を発揮しながら、聖書を読んでいきたいと思います。もしも、その日が来ると日本は荒廃する、と聖書に書かれていたら、どんな気持ちになるのか。

つい最近、およそ 100 年ぶりにエジプトの王ファラオの新しいお墓が発見されたそうです。考古学的大発見ということでニュースにもなっていました。日本では、考古学者の吉村作治教授の活躍で、エジプトのことを知っている人も多いかと思います。吉村教授は、テレビに出てタレントのように活動することで研究資金を賄い、エジプト考古学に貢献していたと言います。その影響でしょうか、日本ではエジプトと言えば、ピラミッド、スフィンクス、ファラオなど古代文明に関するイメージが強く持たれているように思います。けれど、実は、エジプトって、結構、キリスト教も盛んで、人口の 10%はクリスチャンだと言います。日本は 1%未満だと言われているので、10 倍以上の比率ですね。意外にも、エジプトにはクリスチャンが多い。もっとも、私たちプロテスタント教会よりは、カトリックに近い信仰を守っており、その呼び方もキリスト教ではなく、コプト教と言います。エジプトのキリスト教は、コプト教なんですね。

私は、コプト教のことを知ってから、ずっと疑問を抱えていました。と言うのは、「旧約聖書を読んでいると、よくエジプトって悪い感じで書かれているけど、コプト教の人は、そのあたり、どう感じているんだろうか」と。「その日が来ると、・・・エジプトは荒廃し、エドムは滅びの荒れ野となる。ユダの人々を虐げ、その国で、罪なき者の血を流したからだ。・・・わたしは彼らが流した血の復讐をする。必ず復讐せずにはおかない」。まず、エドムと言うのは、ユダヤ・イスラエルから見て、エジプトとは反対側の東に位置する国でした。今回の文脈では、エドムも敵国として扱われていますが、詳しい説明は、またの機会に譲ります。今日、問題なのはエジプト。神様によって荒廃すると言われ、必ず復讐せずにはおかないとまで指摘されている、そんな可哀そうなエジプトです。これ、私たちに当てはめてみたら、どうでしょうか。「その日が来ると・・・、日本は荒廃

する」「日本に必ず復讐せずにはおかない」と、もし聖書に明記されていたら。私たちは、どんな気持ちで、これを読むのでしょうか。

エジプトにおけるキリスト教。コプト教は一体、どのような受け止め方で、聖書を読んでいるのか。ちょっと気になったりしませんか？ 少なくとも、私は気になりますので、ちょっと調べてみました。

結論から言えば、コプト教では、自分の国に下された神様の厳しい裁きを「導きと戒め」として理解しています。自分たちの信仰理解にとって不都合だからという理由で、エジプトを悪く言う箇所を無かったことにする、無視するのではなくて、真正面から受け止めて、それは、今の恵みと幸いに至るために必要な「導きと戒め」であると言うんですね。聖書においてエジプトを悪く言う箇所。分かり易く、反エジプト的な箇所と表現しますが、聖書における反エジプト的な箇所の、その最も有名なものは、間違いなく出エジプト記にある、過ぎ越しに至るまでの 10 の災いのところでしょう。エジプトにおいて抑圧されていたイスラエルの民を、モーセが導き出すまでに起こった、エジプトに対する大小様々な災いの出来事です。コプト教では、これらの出来事を「神様の存在に気付くために与えられた試練である」と捉えます。決して喜ばしい形ではありませんが、エジプトはこれらの災いによって、強烈に神様の存在を目の当たりにした、ということです。確かに、こういう歴史的経験は、日本にはありません。聖書をいくら読み込んでも、どんな形であれ主の御業が日本で実現したという記録は見当たりません。「聖書に自分の国が登場している」という感覚は、神様を知り、受け入れる上で、きっと重大な影響を与えるのだと想像します。

そして、エジプト目線で、聖書の他の箇所を読んでいくと、実は悪いことばかり書かれているわけじゃない、ということにも気付きます。例えば、非常に印象的なのが、イザヤ書 19 章 21～25 節のところ。ちょっと長いですが、読んでみます。「主は御自身をエジプト人に示される。その日に

は、エジプト人は主を知り、いけにえと供え物をささげ、また主に誓願を立てて、誓いの供え物をささげるであろう。主は、必ずエジプトを撃たれる。しかしまた、いやされる。彼らは主に立ち帰り、主は彼らの願いを聞き、彼らをいやされる。その日には、エジプトからアッシリアまで道が敷かれる。アッシリア人はエジプトに行き、エジプト人はアッシリアに行き、エジプト人とアッシリア人は共に礼拝する。その日には、イスラエルは、エジプトとアッシリアと共に、世界を祝福する第三のものとなるであろう。万軍の主は彼らを祝福して言われる。「祝福されよ、わが民エジプト。わが手の業なるアッシリア、わが嗣業なるイスラエル」と」。コプト教では、この聖書箇所を、とても有難く、尊いものとして受け止めています。確かに「祝福されよ、わが民エジプト」なんて名指しで言われたら、嬉しいですね。もともと、このイザヤ書 19 章の箇所は、当時の世界平和を預言しているもので、必ずしもエジプトのみを特別に取り扱っているわけではありません。しかし、神様の愛と恩寵とが、出エジプトの時にコテンパンにされ、その後も反感を向けられ続けてきたエジプトの上に、間違いなく注がれていることを証言しています。エジプトは、確かに神様によって苦しめられ、撃たれ、裁きを受けた。しかし、その経験自体が、神様の存在を忘れがたいものにし、信仰の基礎になっているわけですね。そして、聖書に記された反エジプト的な多くの証言の中に、キラリと光る福音を見つけ出し、その小さな光を大事に見つめながら、信仰と教会とを育てていったのです。

このようなコプト教の信仰理解、聖書の読み方と言うのは、私達にも真似できそうな気がします。人生や社会における苦難を、神様不在の根拠とするのではなく、むしろ、積極的に神様のメッセージを伴った介入であると受け止めてみる。その上で、日々の幸せを感謝し、恵みを数える生き方を整えていく。良いことがあっても、悪いことがあっても、それらを全能の支配者である神様の存在証明なのだと考えるという、そういう受け止め方です。

全てのことに神様の御心が通っていると信じることで、傍から見れば嬉しくも何ともない出来事にも、特別な意味を見つけられるようになります。例えば、私たちにとって、あのクリスマスの後に起こった出来事は、御降誕の輝きに比べてあまりにも暗く冷たいので、極力触れないようにとさえ思えてしまいます。「あのクリスマスの後に起こった出来事」とは、マタイによる福音書が伝えている、ヘロデ王の暴挙から逃れるために生後間もないイエス様を連れてエジプトに向かう、という出来事です。この出来事は、私たちにとっては福音とは程遠いものです。しかし、エジプトにとっては、これは、とても重要な出来事でした。コプト教では、出エジプトによって裁かれ、その後も不遇に晒されてきた歴史が、幼子イエス・キリストの来訪によって赦され、癒されたのだと理解されるのです。あんなにも不出来で、反感を買い、冷たく扱われた、この国に、救い主が訪ねて来られた。なんて有り難いことだという。この発想も、私たち真似ていたいと思います。傍から見れば何てことはない出来事も、主の導きを信じ、主の御心のあることを受け入れ、また、反省と悔い改めの祈りが伴っているならば、それは特別な祝福として受け取ることができる。これも罪を自覚する信仰者が持ち得る、翻って人生を幸せに生きて行くためのメソッド、人生のコツだと言えるでしょう。

聖書には、数多くの失敗が記され、試練が綴られています。それは、まるで私たちの人生のようです。そして、失敗と試練の狭間に、時々、喜びが備えられ、祝福が置かれています。これまた、私たちの人生みたいです。大切なことは、聖書の記述には主の御心が反映されており、私たちの人生にも主の導きがあるということです。聖書において、裁かれ、撃たれ、不遇の中を歩んできたエジプトと、にも関わらず、主を信じ、平和と安寧を享受しているコプト教の信仰の姿を通して、私たちも苦難があればこそ与えられ、受け取ることのできる祝福と恵みが注がれていることを忘れず、明日の幸いを期待して参りたいと願うものであります。

神様。今日も、私たちをこの礼拝堂へと招いて下さり、感謝致します。あなたは旧新約聖書を通してエジプトという国を取り上げ、戒めと祝福、試練と恵みを与えられたことを語り残してくださいました。そして、あなたの寵愛ばかりを受けたわけではないエジプトにも、信仰の種を蒔き、芽吹かせ、キリストの身体としての教会を置かれました。あなたの御心、あなたの御計画には、私たちの想像と見通しを大きく超えた、祝福された未来があります。あなたを尋ね求め、苦難を超えた先に平安を見出したコプト教の姿勢を学びつつ、私たちも、日常の苦しみ、悲しみの先にある、あなたの恵みと幸いを信じて、今日から新しい1週間を歩み出すことができますように。どうかお守り、お導きください。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

聖書：詩編 145 編 8～14 節

主は恵みに富み、憐れみ深く、忍耐強く、慈しみに満ちておられます。主はすべてのものに恵みを与え、造られたすべてのものを憐れんでくださいます。主よ、造られたものがすべて、あなたに感謝し、あなたの慈しみに生きる人があなたをたたえ、あなたの主権の栄光を告げ、力強い御業について語りますように。その力強い御業と栄光を、主権の輝きを、人の子らに示しますように。あなたの主権はとこしえの主権、あなたの統治は代々に。主は倒れようとする人をひとりひとり支え、うずくまっている人を起こしてくださいます。

神様。

今、私たちは少しずつ暖かさが感じられる、この季節に、あなたから尊い命を与えられ、生きる者とされた3月生まれの誕生者の方々を憶えて祈りを合わせています。あなたは、私たちが生まれる前から、私たちの名を呼び、今に至るまで導いてくださいました。この3月生まれの方々も、人生の様々な局面において、主の助けと慰めと祝福を与えられたものと思います。そして、その恵みに気づき、信仰を告白し、今日も主の日を共に過ごしています。どうか、この3月生まれの方々が、これから先の日々においても、あなたの御守りの内に、幸いを感じ、恵みを数えて歩むことができますように、しっかりとその御手で支え、また励ましてください。御国に帰る、その日まで、主と共にある祝福された毎日を過ごすことができますように。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。